

諸行無常の教えについて

普泉寺 小山 貴大

修証義第一章第三節

無常憑(たの)み難し、知らず露命(ろめい)いかなる道の草にか落ちん、身已(すで)に私(わたくし)に非ず、命は光陰に移されて暫くも停(とど)め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡(しようせき)なし。

熟(つらつら)観ずる所に往事の再び逢(お)うべからざる多し、無常忽(たちま)ちにいたるときは国王大臣親昵(しんじつ)従僕(じゅうぼく)妻子珍宝たすくる無し、唯独り黄泉(こうせん)に趣(おもむ)くのみなり己(おのれ)に随(したが)い行くは只是れ善悪業等(ごつとう)のみなり。

現代語訳

無上の世を、頼みにすることは難しい。知らないうちに、露のように儂い命はどの道の草に落ちてなくなるとも限らない。この身はすでに自分のものではなく、命は時間とともに移り変わっていくものであり、少しの間もとどめることはできない。血色の好いつやつやした顔はどこかに去ってしまい、探し求めようとしても跡形もない。よく観察してみると過ぎ去ったことに再び出会うことができないことは多くある。無常が突然押し寄せてきたときは、国王や大臣や親しい人や召使いや妻子や珍しい宝は助けにならない。ただ一人で黄泉へ行くだけである。自分に従うものはただ自分の行った善悪の行為だけである。